

【原著論文】

中国の大学生における修士教育に対する価値意識 —進路希望別にみる功利志向とその分化—

陳思源※

摘要

近年、中国の修士教育は急速に拡大し、その役割は学術研究から職業的即戦力の育成や社会的地位向上を目的とした教育段階へと変容している。本研究は、中国の大学生が修士教育にどのような価値意識を持つのかを明らかにすることを目的とし、オンライン調査に基づく因子分析および多重対応分析を行った。その結果、価値意識は「進学メリット重視」「進学困難性認識」「就職回避重視」「地域移動重視」の四次元に整理された。特に国内進学志向の学生は修士教育をキャリア発展や社会的地位向上の手段として高く評価していたのに対し、海外進学志向や就職志向の学生は進学のリスクやコストをより重視し、その価値を相対化する傾向が確認された。これにより、修士教育を単純な功利的選択として捉える従来の理解には限界があることが示され、中国に特有の「大学院進学ブーム」の実態を明らかにすると同時に、日中の教育観の差異を理解する上でも意義を持つ。

キーワード：修士教育、中国、学歴の価値意識、功利志向、進路希望

1. 問題設定

本稿では、修士教育が急速に拡大している中国社会において、大学生が修士教育をどのような価値をもつものとして理解しているのかを明らかにすることを目的とする。特に、修士教育が職業的機能を強調する方向へと移行する中国の雇用環境の下で、修士教育に対する価値認識がどのような構造をとっているのか、ま

※ 上智大学 総合人間科学研究科 教育学専攻 博士後期課程

たその認識が進路選択（国内進学、海外留学、直接就職）とどのように関わっているのかを検討する。これらの価値意識を分析することで、現在の中国の教育システムにおける修士教育の位置づけをより一層詳しく理解することを試みる。

近年、中国の大学院教育は飛躍的に発展し、大学院進学ブームが起きており、修士教育が高等教育の中で重要な位置を占めるようになり、高等教育全体の構造を大きく変えた。しかし、急速に増加している修士課程の学生募集数を比較すると、博士課程の学生募集数の増加は緩やかである（図1）。すなわち、中国の大学院進学ブームは大学院教育全体に対してではなく、修士教育段階に集中している。それだけでなく、多くの修士卒業生も博士号を目指さず、近年の博士進学率はほとんど18%以下¹を維持している。すなわち、修士と博士教育が連続的な学術準備過程とはみなされなくなったことを反映している。

この傾向は政策面からも一層促進されている。中国教育部は、2025年までに専門職修士課程の募集規模を修士の募集総規模の2/3に拡大する計画が示されている²。図1によると、専門職大学院への入学者数は年々増加しており、2017年に研究系大学院の入学者数を上回ってから急増している。専門職大学院の発展が中国における修士教育の新たな傾向を示しており、教育の焦点が従来の学術研究から職業技能的能力の育成へと移行していることが見て取れる。特に2020年のコロナの影響を受け、ますます厳しい雇用情勢に直面し、政府は大学生の就職難を緩和する手段として大学院の募集拡大を行っている。こうした状況の下で、修士教育は社会的に能力や競争力を高めるための制度的な通路として位置づけられる。

また、中国の修士教育は全国統一試験を通じて選抜が行われ、その試験結果に基づいて大学院の序列が形成されている。このような仕組みにより、修士教育は社会的に認知された「学歴向上の手段」としての性格を強めている。

労働市場の観点から、中国と日本には大きな違いが見られる。日本では、中国と同様に大学院拡充政策が行われたものの、中国のような大学院進学ブームは見られなかった（吉田，2020）。日本の大学院規模拡大政策は1990年代のバブル崩

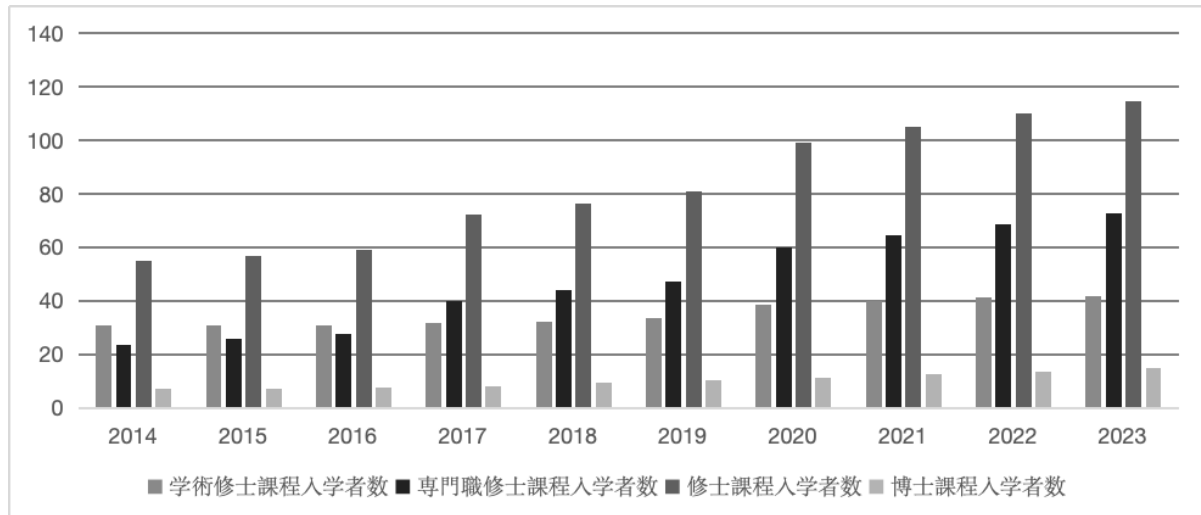


図1 大学院課程入学者数の変化（万人）

出所：『中国教育統計年鑑』各年版より筆者作成

壊と大卒者の増加で就職難と同時に行っており、大学院修了者の社会的価値が上昇しなかった（吉田，2020）。また、大企業において整備された企業内教育システムと年齢給が、大学院修了者の位置づけを難しくしている（吉田，2020）。このため、修士課程修了者の評価が必ずしも高いとは言えず、積極的に修士課程修了者を採用する企業は極めて少ない（濱中，2020）。これに対し、中国の労働市場では、OFF-JT（Off-the-Job Training）が人材育成の主要な手段として位置づけられており、修士教育に対する期待は相対的に大きい。大学院は「即戦力」として活躍できる人材を育成する重要な段階とみなされ、修了者には労働市場への迅速な適応が求められている。このような制度環境の下で、修士学歴は中国社会において、「より良い機会」へとつながる合理的な選択肢として理解されやすい。

一方で、修士教育の急速な拡張に伴い、その質に対する懸念が生まれている。実際の教育現場では、育成目標が十分に整理されないまま教育が行われており、授業は依然として従来型の講義中心となり、研究指導や創造的能力の育成との連携も不十分な状況がみられる（李・王・沈・楊・張，2023）。また、課程類型に応じた育成上の工夫が十分になされておらず、博士課程に接続する3年制の学術学位大学院と、労働市場に直結する2年制の専門職学位大学院の教育内容が同質化している（楊・楊・楊，2024；李・王・沈・楊・張，2023；李，2016；満，2013）。

このような育成環境の下で、大学院生は既存の知識の理解や習得に重点が置かれがちであり、創造性や研究上の独自性が十分に発揮されにくい状況が生じている（李・王・沈・楊・張，2023）。さらに、社会全体に広がる高学歴志向や厳しい就職環境の下で、一部の大学院生が学術や科学研究を追求する代わりに、強い功利志向（知識の獲得や学術的発展よりも、進学によって得られる職業的・経済的利益や社会的地位の向上を主な目的とする価値意識）を持つ進学動機を示すようになっている（趙，2023）。そのため、中国における修士教育の現状では、従来の「学術学位＝学術志向」「専門職学位＝職業志向」という一般的な分類枠組みが適用しづらい。

さらに、修士教育の選択はすべての大学生にとって自明な進路となっているわけではない。学部教育に比べて修士教育の進学率は限定的であり、進学する学生の間でも国内進学と海外留学の間で進路が分かれている。また、修士課程を経ずに労働市場に入る大学生も少なくない。こうした進路選択の多様性は、修士教育に対する価値認識が単一的ではなく、複数の理解が併存している可能性を示している。進路選択には経済的負担や制度的条件といった客観的要因も影響するが（陳，2025）、そうした制約の下で大学生自身が修士教育をどのような価値をもつものとして理解しているのかを把握することは、進学行動の理解に不可欠である。

そこで、本稿では異なる進路選択を行った大学生を分析対象として、修士教育に対する価値意識構造を分析し、大学生の間でどのような共通因子と分散が存在するのかを検証するとともに、その中で功利志向が占める位置を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 学歴に関する価値意識と功利志向

教育の価値意識に関する研究において、「なぜ学歴は価値をもつのか」という問いをめぐっては、すでに一定の理論的蓄積が形成されている。人びとがより高い学歴を追求し続ける理由を説明するために、先行研究では、人力資本論（Becker, 1964）、シグナリング理論（Spence, 1973）、リスク回避理論（Breen & Goldthorpe, 1997）など、複数の分析枠組みが提示されてきた。これらの理論は、それぞれ異なる説明経路をとりながらも、教育を進路選択における重要な社会的資源として位置づけ、学歴追求の合理性を説明している点で共通している。

なお、学歴の価値をめぐる研究は、教育拡大が進行する特定の時期に集中的に蓄積されてきた点も指摘できる。教育機会の拡大に伴い、教育がもたらすリターンは次第に不均質化し、個人が教育選択において直面する不確実性やリスクも高まってきた（Dore, 1976）。しかし、こうした状況にもかかわらず、その過程において「よい教育→よい仕事→幸福な人生」というサクセス・ストーリーは繰り返し動員され、学歴の価値は社会的に持続的な正当化を受け、やがて広く共有される社会的常識として定着していった（荻谷, 1995）。このような状況のもとで、教育の価値やリターンそのものが、もはや個人の主観的判断にとどまらず、分析の対象として捉えられるようになった。

この意味において、現在の中国社会は、学歴価値があらためて問われる局面にあると言える。近年、中国では高等教育規模の拡大が続く中で、修士課程への進学が顕著な広がりを見せている。これに伴い、修士教育が合理的な選択として広く受け入れられている社会的背景について、既存研究はさまざまな側面から検討を行ってきた。具体的には、科举制度に連なる学歴信仰（蔣, 2017；李, 2016）、労働市場における高学歴への需要と評価（李, 2016；韓, 2016；王, 2018）、さらには修士学歴が地域移動を促進する機能（李, 2016；黄, 2020）などが指摘されている。これらの研究は、制度的・歴史的・構造的な観点から、中国における修士教育拡張の論理を明らかにしてきた点で重要な意義をもつ。

しかしながら、修士進学行動を分析する既存研究の多くは、「修士学歴には価値がある」という前提を自明のものとして受け入れ、その前提自体を分析対象として扱うことは必ずしも十分ではなかった。すなわち、修士教育はしばしば、疑問の余地のない「価値ある選択」として前提化されてきたのである。だが、この前提は、すべての社会的文脈において同様に成立するとは限らない。修士教育の社会的意味やそこに付与される価値は、教育制度の構造や労働市場の条件によって大きく左右される（吉田, 2020）。この点を踏まえると、主として学部段階の経験に基づいて構築されてきた学歴価値の分析枠組みが、修士段階においてもなお妥当であるのかについては、あらためて検討する余地がある。学歴競争と教育選択の重要な延長段階として、修士教育が学歴価値体系全体の中でいかなる役割を果たしているのかについては、依然として体系的な議論が不足している。

さらに、教育価値をめぐる既存研究は、特定の単一側面に着目して分析を行う

傾向が強い点も指摘できる（藤田，1983）。しかし、現実の社会において教育が担う価値は、決して単一かつ同質的なものではない。学歴は、就職上の優位性、社会的地位、リスク回避の手段、さらには制度的・象徴的資源として、複数の意味を同時に帯びて理解されうる（藤田，1983）。したがって、単一指標による分析を超え、価値意識そのものの構成を構造的に捉える視点が求められる。

以上の問題意識に基づき、本研究では、「誰が学歴のリターンを重視するか」といった単純な比較にとどまるのではなく、教育に関する価値意識がいかなる複数の次元から構成され、それらが個人の認知の中でどのように組み合わせられ、異なる進路選択の間でいかなる分化構造を示すのかを明らかにすることを課題とする。

このような整理のもとで、本研究における「教育に関する価値意識」とは、個人の内面的価値観や心理的態度を指すものではなく、学歴が社会においてどのように評価され、理解され、用いられているのかという理解の枠組みを意味する。また、「功利志向」とは、その枠組みの中で、就職機会、地位達成、リスク回避といった学歴の機能的価値がどの程度強調されているかを示す概念である。言い換えれば、本稿は、大学院進学動機の心理的要因を説明することではなく、学歴が正当かつ合理的な判断基準として社会的に共有されている状況のもとで、人々がどのように進路選択を行っているのかを明らかにする点にある。

2.2 中国の修士教育における価値意識の展開と限界

日本における中国高等教育研究は、近年増加している。これらの研究では、主に大学院教育の拡張や専門職大学院の導入とその背景に注目し（陳，2010；満，2013；李，2016）、大学院進学熱の現象について議論している。しかし、その多くは政策と制度レベルの議論にとどまっている。

一方、高等教育における進学行動を対象とした研究では、経済的成本や家庭の社会経済的地位、労働市場の動向といった外的要因（李，2016；韓，2016）、大学生の就職意識（李，2011）や大学院生の進学動機（韓，2016；馬，2021）に着目した分析が行われてきた。特に、研究系大学院と専門職大学院の進学動機の比較（韓，2016）や、特定分野における進学動機の検討（張，2015；向坂，2022）は、修士教育内部の多様性を示す点で一定の成果を挙げている。しかし、これらの研究の多くは、調査対象を国内の修士課程在籍者に限定しており、海外進学や

進学しなかった学生の視点が欠けている。その結果、修士教育に対する価値意識が、どの範囲で共有され、どの範囲で分化しているのかを包括的に把握することは難しい状況にある。

海外留学に関する研究は、日本の高等教育研究を中心に、在日中国人留学生を対象とした進学行動に関する研究を進めてきた。これらの研究では、留学生が日本の大学院を選ぶ際の要因や選択プロセスに焦点が当てられている（向坂，2022；三好，2023）。これらの研究は、日本国内における留学生の進学行動の特徴を明らかにする重要な知見を提供しているものの、対象を日本という特定の国に限定しており、中国学生の海外大学院進学行動を包括的に理解する視点が欠けている。

さらに、中国国内においても、海外留学に関する研究は主に高校生の大学進学段階に注目し、大学院進学に関する研究は少ない現状がある。李（2013）の研究によると、中国の大学生が自費留学の動機には、より質の高い教育の追求、海外の生活環境への憧れ、国内の就職圧力の回避といった要因が挙げられているが、これらの動機が国内進学とどのように異なる価値理解に基づくのかについては、十分に検討されていない。

以上のように、既存研究は修士教育をめぐる進学動機や制度的背景を多角的に明らかにしてきた一方で、異なる進路選択を視野に入れた価値意識の構造的把握には限界がある。

2.3 中国の修士教育制度における構造的課題

中国の修士課程は、研究系（学術型）と専門職系の二本立てで制度化されている。しかし実際には①選抜方法の硬直性、②教育プログラム運営の重複、③労働市場での評価の曖昧さという三つの構造的課題が存在する。

まず、修士課程の選抜は、教育部による強い指導のもとで、全国共通の学力筆記試験を行われ（南部，2016）、知識を求め過ぎる傾向があり、学生の本来の創造力、思考力は測れず、必要な基礎知識が身に付いている試験対策をする学生にとって有利になると指摘されている（韓・河合・森，2014）。その結果、本当に学術的な潜在力があり、研究系修士課程に適した学生を選抜することが難しく、または分析力と問題解決能力が強く、専門職修士課程に適した大学院生を選抜することも困難となっている（陳・康，2022）。

そして、陳・康（2022）によると、現行の教育プログラムの運営実態を見ると、専門職大学院と研究系大学院の養成過程、教育内容、論文基準がほぼ同一であり、多くの場合、指導教員も共通しているため、専門職大学院の学生は学術化され、その専門性が薄れ、本来の特色を失ってしまう傾向にある。

一方、韓（2016）は、中国の労働市場では専門職学位と学術学位があまり区別せず、専門職学位の特徴は無視される傾向にあり、専門職学位の競争力と社会的評価は学術学位に比べて低いとされていると指摘した。つまり、中国では就職を目的に進学を選択する学生のニーズに応えるために、専門職大学院を開設しているが、実際の状況から見ると、労働市場での専門職大学院に対する評価が相対的に低いため、非学術的目的を持つ学生は依然として伝統的な研究系大学院に詰め込まれている。

以上より、名目上は二体系が併存しているものの、制度運用上の境界は希薄であり、進学者が両者の役割差を明確に認識することは容易ではない制度的状況にあると考えられる。

2.4 本研究の位置づけ

既存研究は、中国の修士教育をめぐる進学動機や制度的背景を多角的に明らかにしてきたものの、多くは専門職学位と学術学位の区分や、国内修士課程在籍者を分析対象とする枠組みにとどまってきた。その結果、修士教育が大学生の間でどのような価値として理解され、どの範囲で共有されているのかという点については、十分に検討されていない。

とりわけ、進学行動を所与の前提とする研究が多く、修士教育の価値が進路選択以前の段階でどのように認識されているのか、また異なる進路を志向する学生の間でどのように分化しているのかについては、分析の余地が残されている。本稿は、こうした研究上の課題を踏まえ、修士教育を単一の制度として捉えたうえで、進路希望別に価値意識の構造を比較する点に特徴がある。

3. 調査

3.1 調査方法と調査時期

本調査は2022年6月から8月にかけて、中国国内の大学生を対象にオンライ

ンで調査を実施された。合計 1606 人が参加し、最終的に 1341 人の有効回答（有効率 83%）を得た。質問紙は大学生が日常的に利用する WeChat、QQ、ウェイボー、RedNote（レッドノート）など複数の SNS 上の学生コミュニティに掲出することで、異なる学生層へ幅広くリーチし、中国全土の大学生の多様な実態を捉えることを可能にした。

3.2 質問項目

本調査では全 56 項目の質問が設けられ、本稿ではそのうち 2 項目を利用した。

【修士教育に対する価値意識】前述の先行研究に基づき、修士教育に対する価値意識に関する質問項目を設計した（表 2 を参照）。回答者は、「とても合っている」、「まあ合っている」、「あまり合っていない」、「全く合っていない」の 4 点尺度で回答する形式を採用した。

【進路希望】設問は「大学卒業後の希望進路（第一選択）」である。回答者は「就職」、「国内大学院進学」、「海外大学院進学」の 3 つの選択肢から一つを選んで回答する形式を採用した。

表 1 本調査のサンプル分布とウェイト調整結果

変数		統計年鑑	元データ	調整後
ジェンダー	女	53.0%	58.9%	56.8%
	男	47.0%	40.6%	43.2%
地域	東部	50.4%	68.3%	47.4%
	中部	35.9%	22.1%	39.7%
	西部	13.7%	9.6%	12.9%
学校タイプ	985・211 大学	10.5%	19.4%	9.1%
	985・211 以外	89.5%	80.6%	90.9%
専攻	文系	40.5%	62.0%	38.7%
	理系	49.7%	24.3%	54.3%
	芸術系	9.7%	9.4%	7.0%
進路希望	就職		31.0%	39.3%
	国内大学院進学		56.6%	53.1%
	海外大学院進学		10.7%	7.5%
N			1341	1444

3.3 データ調整

本調査では、オンライン調査の利点を活かし、中国全土にわたる幅広い地域の

大学生にアクセス可能な方法を採用した。特に、価値意識に関する研究において、匿名で回答できるため、オンライン調査は有効である。しかし、オンライン調査にはサンプルの代表性が欠如している可能性も懸念されるため、本稿では『中国教育統計年鑑（2019 年）』を母集団統計として参照し、ジェンダー、地域、学校タイプおよび専攻分野の 4 属性についてウェイト調整を実施した。ウェイト値は、各属性を同時に考慮した多変量同時調整（raking 法）により算出し、個票データ

に乗算することで加重データを作成した。調整前後のサンプル構成の変化については表 1 に示しており、ウェイト調整により代表性は一定程度改善されている。なお、本稿におけるすべての分析は、この加重データに基づいて行っている³。

4. 結果と考察

本稿は、中国の大学生が修士教育に対してどのような価値意識を有しているのか、その構造を明らかにするとともに、こうした価値意識が異なる進路選択のあいだでどのように分化しているのかを検討することを目的とする。

この研究目的を踏まえ、本稿では分析を二段階に分けて提示する。まず、大学生による修士教育に対する複数の評価項目を用いて因子分析を行い、潜在的な価値次元を抽出することによって、修士教育の価値意識の基本的な構成を把握する(4.1)。次に、因子分析によって抽出された価値次元と、大学生の進路希望(国内進学・海外進学・直接就職)をあわせて分析枠組みに組み込み、多重対応分析(以下、MCA)を用いて、進路選択と価値意識との対応関係を可視化する(4.2)。

このような分析対象に対して回帰分析などの手法を用いる場合、あらかじめ特定の進路選択を従属変数として設定し、価値意識が線形かつ一方向的に作用することを前提とせざるを得ない。しかし、この前提は、本稿が目指す価値意識の全体構造を把握するという分析目的とは必ずしも整合的ではない。これに対して、MCAは、カテゴリ変数間の相互関連に着目し、因果関係を事前に仮定することなく、複数の要素によって構成される関係構造を同一の空間上に配置することを可能にする探索的分析手法である(知念, 2022)。本稿では、こうしたMCAの方法的特性を踏まえ、価値意識と進路選択との関係を構造的に捉えることを試みる。

4.1 大学生の修士教育に対する価値意識

まず、本節では、大学生の修士教育に対する価値意識の潜在構造を明らかにするため、質問項目への回答に基づき因子分析を実施した。本研究で用いた質問項目は、修士教育に対する期待や負担を測定し、4点Likert尺度項目から構成されている。因子抽出には、観測変数間の共通分散に基づいて潜在因子を推定でき、態度型データにおいて正規分布を前提としない主因子法を採用した。回転方法については、各価値次元間に一定の関連性が想定されるため、Kaiserの正規化を伴

うプロマックス回転を適用した。因子数の決定には固有値が1以上であることを基本とし解釈可能性を考慮したうえで、項目の採否については因子負荷量や共通性が低い項目、および複数因子にまたがって負荷する項目を中心に、内容的妥当性を踏まえて判断した。その結果、「進学メリット重視志向」、「進学困難性認識志向」、「就職回避重視志向」と「地域移動重視志向」の4因子が抽出された(表2)。

表2 大学生の大学院に対する価値観の因子分析

質問項目	進学メリ ット重視	進学困 難性認識	就職回 避重視	地域移 動重視
もっといい学校に入れることができる	0.705	-0.088	0.044	-0.051
職業に必要な資格を取ることができる	0.682	-0.078	-0.017	0.043
就職する際に有利になる	0.679	-0.009	-0.132	-0.030
将来的には潜在的な収益がある	0.622	0.001	-0.124	0.042
より多くの友達を作り、ソーシャルサー クルを広げることができる	0.573	0.032	0.069	0.191
学術研究ができる	0.501	0.096	0.034	0.087
親の願いをかなえることができる	0.456	-0.136	0.065	0.201
修士の学位を取得できる	0.413	0.100	-0.122	0.067
大学院受験に合格するのは難しい	-0.119	0.721	-0.047	0.260
大学院受験の準備が大変だ	-0.094	0.610	0.012	0.099
進学の費用が高い	-0.124	0.580	-0.065	0.044
勉強が嫌い	0.265	0.568	0.042	-0.190
勉強が苦手	0.288	0.562	0.125	-0.242
早くお金を稼ぐことができない	0.007	0.492	0.051	-0.106
2年以上の年月を費やす	-0.115	0.474	-0.069	-0.011
現在の中国は就職難だ	-0.052	-0.035	0.893	-0.021
現在の中国は、学部だけを卒業しても良 い仕事が見つかりづらい	-0.091	0.047	0.616	-0.138
戸籍を取得するのに役立つ	0.170	0.002	0.073	0.699
定住に役立つ	0.312	0.007	0.009	0.487
固有値	4.577	2.735	1.721	1.057
寄与率	21.185	11.269	6.619	3.123
Cronbach の α	0.821	0.771	0.759	0.661

因子抽出法:主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

以下、それぞれの因子について詳細に論じる。

(1) 進学メリット重視志向と功利志向の多層性

第1因子には、「いい学校に入れる」、「職業資格」、「就職有利」、「潜在収益」、「ソーシャル」、「学術研究」、「親の願い」、「学位取得」といった質問項目が含まれており、進学によって得られる多面的なメリットを反映しているため、「進学メリット重視志向」と命名した。この因子は、修士教育が単一的な機能を持つ場ではなく、労働市場での競争力向上、社会的地位の確立、学術研究、家庭の期待の実現や社会的ネットワーク形成といった多様な価値を提供する場であることを示している。

本研究では、大学院進学が単なる一方向の利益を追求するものではなく、多面的な価値を含むことを明らかにすると同時に、学術志向が完全に排除されているわけではない点にも着目した。進学メリット重視志向の因子に含まれる項目を分析すると、学術研究に関する意識が一定程度残存していることがわかる。これを検証するため、功利志向を代表する「就職する際に有利になる」と学術志向を代表する「学術研究ができる」（表3）の度数分布を比較した。

具体的には、「就職する際に有利になる」と回答した学生のうち、51.6%が「とても合っている」、34.6%が「まあ合っている」と答え、全体の86.2%が肯定的な回答を示した。一方、「学術研究ができる」では「とても合っている」が33.3%、52.2%が「まあ合っている」で、全体の85.5%が肯定的であった。全体の肯定率に大差はないが、「とても合っている」の割合は「学術研究」で低く、大学生が学

表3 価値志向の度数分布

就職する際に 有利になる (功利志向)	人数	割合
とても合っている	746	51.6%
まあ合っている	500	34.6%
あまり合っていない	156	10.8%
全く合っていない	42	2.9%
学術研究ができる (学術志向)	人数	割合
とても合っている	481	33.3%
まあ合っている	754	52.2%
あまり合っていない	189	13.1%
全く合っていない	20	1.4%

術価値よりも就職価値をより高く評価していることを示しており、大学院進学の動機がより実利的な要因に偏っていることがわかった。これらの結果は、学術研究が独立した主要な動機ではなく、功利志向の一部として捉えられる傾向が見られる。大学生は純粋な学術的価値より、キャリア開発や社会的地位向上といった総合的な価値を重視する傾向を持つことを示している。つまり、修士教育はもは

や学術研究や研究者の養成の場ではなく、労働市場や社会的多様なニーズに応える実用的価値を提供する場として認識されていることが明らかとなった。

(2) 進学困難性認識志向と進学決定の複雑性

第2因子は、「受験合格の難しさ」、「受験の大変さ」、「進学費用」、「勉強嫌い」、「勉強苦手」、「金を稼がない」、「時間を費やす」という進学に伴うリスクやコストを集中したため、「進学困難性認識志向」と命名した。この因子は、進学に際して学生が直面する困難や負担を示しており、修士教育への進学決定が単純な選択ではなく、多面的な要素を含む複雑な判断であることを物語っている。

修士教育が「機会」として広く認識される一方で、本研究では進学困難性が重要な側面として浮かび上がった。大学院進学ブームの下で、多くの研究は修士教育の価値に注目しているが、受験競争の激しさと合格率の低さ、および高い学習コストを見過ごしている。中国では大学院入試の競争が非常に激しく、少なくとも1年以上の受験勉強期が必要である。しかし、それにも関わらず競争倍率は30%未満⁴であるため、不合格は一般的である。大学院進学に失敗した後、受験を諦めずに二浪、三浪（中国語：二戦、三戦）を試みても普遍的な現象になった。このような状況下で、進学は単なる学術的探求の場としてではなく、試験競争の一環として捉えられることが多い。さらに、受験を通じた進学のプロセスは「高校入試」や「大学入試」と同様の考え方で行われる傾向があり、修士教育が学術研究の本質から乖離している可能性を示唆している。これらの結果は、修士教育が単なる「機会」として一面的に捉えられるわけではなく、大学生が進学のリスクとリターンを慎重に評価している一面を明らかにしている。

(3) 就職回避重視志向の独立性

第3因子は、「就職難」および「大卒就職難」の2つの項目を含み、「就職回避重視志向」と命名され、労働市場の競争激化や学歴インフレが進行する中で、修士教育が就職困難からの「避難所」として認識されていることを示唆している。

従来の研究では、「就職回避」と「キャリア開発」がしばしば同一視されてきた。しかし、本研究の結果は、就職回避志向が独立した因子として抽出されたことにより、修士教育が単なる積極的なキャリア形成の手段ではなく、就職難という社会的背景の中で、消極的な選択肢として機能している可能性を示している。また、

この志向の存在は修士教育が学歴の価値そのものに依存し、学術的内容や実質的なスキルの重要性が相対的に軽視される傾向を助長していることを暗示している。

(4) 地域移動重視志向と地域価値の特異性

第4因子は、「戸籍」と「定住」は地域に関する特別なニーズとして、「地域移動重視志向」と命名した。この因子は、中国の戸籍制度や地域間格差が修士教育における進学動機に与える影響を明確に示している。

中国は地域が広く、戸籍制度⁵が存在している。住んでいる都市の戸籍の有無による教育、医療や福祉などの公共サービスなどの基本的な権利に影響している。そのため、地域移動の価値は中国の高等教育において、独特な優位性を発揮しており、各都市が高学歴人材に対して打ち出した人材優遇政策⁶は、大学院生が出身地から理想的な居住地に移動することを助けている。

地域移動重視志向は、単にキャリア形成にとどまらず、将来のライフプランを描く上で重要な要素として機能している。この志向は、中国の修士教育が個人のキャリアアップや学術的探究だけでなく、生活基盤や社会的ステータスの向上にも寄与していることを示しており、戸籍制度や地域間格差といった中国特有の社会背景に基づくもので、他国の修士教育では見られない独自性を持つと言える。

4.2 大学生の進路希望と価値意識

前節では、因子分析を用いて大学生の修士教育に対する価値意識の諸次元を抽出し、その多次元的な構造を明らかにした。本節では、これらの価値次元が、異なる進路希望（国内進学、海外進学、就職）をもつ大学生のあいだで、どのように分化し、組み合わせられているのかを検討する。

分析にあたっては、因子分析によって抽出された各価値次元と大学生の進路希望を MCA に投入し、両者の関係を次元空間上に可視化した⁷。以下では、第1軸および第2軸に着目して分析を行う。第1軸の分散説明率は 29.7%、第2軸は 25.1%であり、両軸で全体の 54.8%を説明している。

以下では、各カテゴリが第1軸および第2軸上に示す配置位置と、その相対的な分布傾向にもとづいて、軸の意味づけを行う。第1軸は修士教育に対する大学生の価値意識の構成を反映し、進学メリ

表4 多重対応分析の結果

次元	Cronbach の アルファ	固有値	分散率
1	.408	1.484	29.7
2	.254	1.255	25.1
総計		2.739	54.8
平均	.337 ^a	1.369	27.4

ット、進学困難性、就職回避と地域移動を含む。この軸では、負の値は「軽視」の価値意識を表し、正の値は「重視」の価値意識を表す。第2軸は国内進学、海外進学と就職という進路希望で構成され、負の値は「進学」、正の値は「就職」を指す。そして、象限における価値意識と進路希望の分類に基づき、4つの象限の特徴を定義した。第一象限は進学困難性と就職回避を重視する「リスク重視」、第二象限は進学メリットと地域移動を軽視する「学校価値軽視」、第三象限は進学困難性と就職回避を軽視する「リスク軽視」、第四象限は進学メリットと地域移動を重視する「学校価値重視」である。

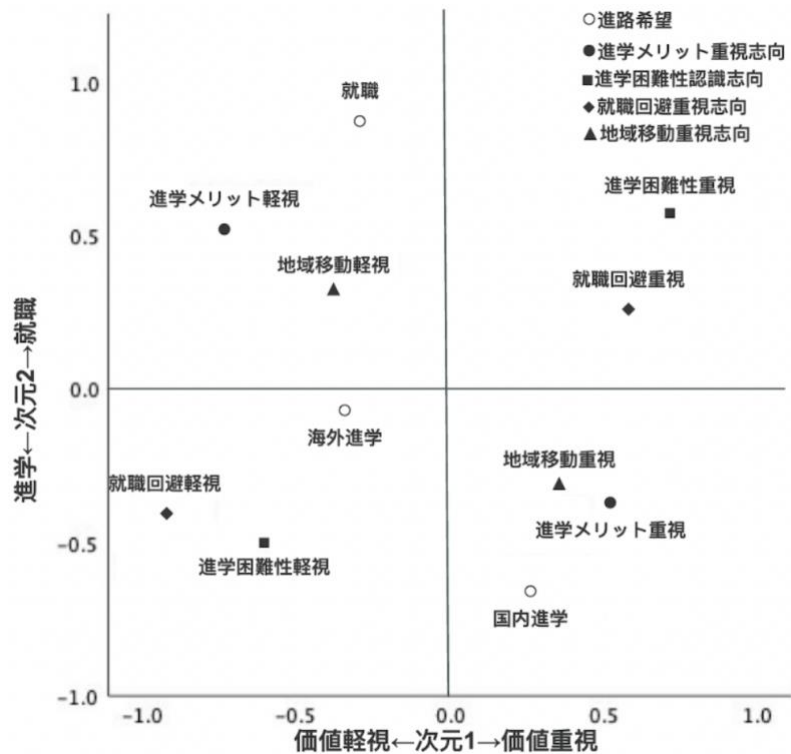


図2 大学生の進路希望と大学院教育に対する価値意識

MCAの分析結果(図2)によると、国内進学志向のある学生の価値意識は「進学メリット重視」や「地域移動重視」という学校価値と密接に関連している。つまり、国内進学希望者は、より良い職業やキャリアの発展機会など進学による長期的な利益を重視しているため、学業の継続を選択している。しかしその一方で、これらの大学生は就職難を主な問題と見なしていない。このようなリスクの無視は、社会が高学歴を過度に重視し、高学歴に見返りをもたらすという楽観的な期待に由来する可能性がある。また、政府は不況下で大学院の募集規模を拡大して就職ストレスを緩和しているが、個人の大学院希望はキャリア開発への長期的な

考慮に基づいていることが多い。就職難以外の観点から大学院進学問題を考える必要性も提起されている。

次に、国内進学に比べ、海外進学志向の学生は、就職志向の学生の価値意識に相対的に近い位置にあることがわかった。就職志向の学生と同様に、海外進学志向の学生は「進学メリット」や「地域移動」といった学校価値を重視していない傾向が見られる。また、「進学困難性」やコストに対する評価も相対的に低く、進学に伴うリスクを国内進学志向の学生ほど強く意識していない傾向がみられた。さらに、「就職回避」も重視する方向には位置しておらず、少なくとも就職難からの単純な逃避として修士教育を選択しているとは言い難い傾向が示唆される。これらの結果は、海外進学志向の学生が、国内進学志向の学生のように学歴競争や制度的メリットを中心とする価値枠組みに依拠しているとは限らないことを示している。すなわち、進学判断においてリスク回避や学歴的有利性を重視する国内進学志向とは異なる評価構造が存在している可能性が示唆される。したがって、海外進学志向と国内進学志向のあいだには、修士教育の意味づけをめぐる明確な分化が認められる。

最後に、就職志向の学生の価値意識は「進学メリット軽視」や「地域移動軽視」という学校価値と密接に関連しているため、国内進学志向の学生とは正反対の価値意識を持っていることがわかった。就職を希望する学生は大学院進学のメリットや地域移動の価値を重視しておらず、教育の付加価値を認めない傾向があることを示している。また、就職志向はリスク回避重視とは関係があるとは言えない。つまり、就職を選択することは就職が難しくない、リスクが高くないと思っているのではなく、修士教育に十分な価値がないと考えていることを示している。

上述の分析結果は、中国の大学生が修士教育に対して抱く価値意識が一様ではなく、功利志向に対する反論の可能性を提示していると言える。具体的には、国内進学志向の学生が進学メリットや地域移動を重視する一方で、海外進学志向の学生はこれらを軽視する傾向があり、伝統的な功利志向とは異なる進学動機を示している。また、就職志向の学生は修士教育の付加価値そのものを疑問視しており、高学歴を必ずしも価値あるものとして受け入れていない可能性がある。これらの結果は、功利志向が修士教育への進学動機を完全に支配しているわけではなく、多様な価値意識が共存していることを示している。

5. 考察

本稿は、中国の「大学院進学ブーム」を背景に、在学中の大学生全体を対象として国内進学・海外進学・就職という三つの進路希望と、それを支える価値意識構造の関係を定量的に検証した。従来研究が大学院在籍者や学位種別の比較に偏ってきたのに対し、本研究は行動前の価値意識に着目し、進路選択の意思形成プロセスを捉える視座を提示した点に独自性がある。

まず、修士教育の価値に対する認識は多様でありつつも、功利志向が主流であることが確認された。因子分析により、修士教育に対する価値意識は進学メリット重視・就職回避・地域移動・進学困難性認識の四因子から成ることが確認された。とりわけ「進学メリット重視志向」には、キャリア開発、社会的地位の向上、学術研究、家庭の期待の実現など幅広い功利的価値が含まれ、大学生は修士教育を単なる学術準備ではなく、総合的な社会的資源として期待していることがうかがえる。大学生の認識上では、修士教育は学士課程の延長として機能する一方で、博士課程への準備段階としての役割は低下していることが示唆されている。

次に、「就職回避重視志向」と「地域移動重視志向」の存在は、大学生が教育内容やスキルの実質的価値以外の付加的便益を修士課程に期待する傾向を示している。「就職回避重視志向」は、就職競争の激化や学歴インフレが修士教育を「避難所」として位置付ける背景を浮き彫りにした。一方、「地域移動重視志向」は、中国特有の戸籍制度や地域間格差問題を反映し、教育を地理的および制度的バリアを超える手段として利用する付加価値を示している。このような現象は、修士教育が一部の大学生にとって、社会的・地理的課題を乗り越える手段として期待していることを示唆している。

一方、従来の先行研究では、修士教育が功利的価値の追求に偏っているとされてきたが、本研究では大学生が進学のリスクとコストを慎重に評価していることも明らかになった。「進学困難性認識志向」は、修士教育が単なる機会としてではなく、受験競争や費用、時間的な負担といったリスクを伴う現実的な選択肢として認識されていることを示している。これらの結果から、修士教育に対する価値意識は、単に学術的価値から功利的価値へと移行しているのではなく、複数の評価軸が併存する多面的な理解として形成されていると解釈できる。

こうした価値意識の多面性を踏まえ、本稿では MCA を用い、進路希望別の修

士教育への理解の構造を可視化した。既存研究では、大学院進学の動機について、国内外を問わず就職難の回避（李，2013）や、就職需要・キャリア開発（李，2016；韓，2016）といった功利的志向が主な要因として説明されることが多かった。しかし、本稿の調査結果では、就職回避因子はいずれの志向群においても主要な決定要因とはならず、功利的志向因子も国内進学志向者にのみ顕著であったことが確認された。これにより、大学院進学を単線的に「就職難回避」や「功利的選択」として理解するだけでは不十分であり、進路希望ごとに異なる価値意識に基づく多様な選択行動が展開されている実態が明らかになった。それぞれの進学志向別に説明すると、以下の通りとなる。

国内進学志向の学生において、修士教育が「進学メリット」や「地域移動」という極めて功利的な目的と結びついており、その価値意識が中国社会構造と密接に連動している。修士教育が単なる教育あるいは学術的準備段階を超え、労働市場への適応、戸籍制度を超える手段、家族的期待の実現といった多面的な社会的役割を期待しており、進学は個人の教育選択というより、社会制度との適応行動の一環と見ることができる。これに対し、海外進学志向の学生は、本来であれば国内進学と同様に、中国社会における進学熱や競争環境への適応行動の一環と位置づけられるはずである。しかし実際には、進学のメリットや困難性を相対的に重視せず、就職難に対する感度も低い傾向が見られた。むしろ、国内制度における競争や制約から距離を取り、教育の質や自己成長、異文化経験といった非制度的な独自の価値基準に基づく選択行動が展開されている可能性がある。また、就職志向の学生においては、進学による利益への評価が限定的であり、修士教育の社会的・経済的価値に対して懐疑的な姿勢が見られ、現実的なキャリア構築を志向する選択が反映されていると考えられる。

以上の結果は、国内進学志向の学生が従来の功利的枠組みが一定程度当てはまることを確認した一方で、海外進学志向や就職志向の学生が従来の理論では捉えきれない独自の価値意識が存在していることを明らかにした。特に、国内進学と海外進学の志向者の間でも価値意識に大きな差異が見られ、進学を希望する大学生の中にも内在的な価値分化が存在していることが示された。とりわけ、進学という行動自体を伴わない層における認識構造の分析を通じて、「進学＝功利的選択」という構図に揺らぎが生じ、修士教育に対する功利志向の一元的支配という

前提に対して再考する必要があることを実証的に示した。

本稿は、これまで「進学＝功利的」という共通認識が定着している中国社会の文脈において、行動前の価値意識に着目することで、進学行動の前提にある認識の多様性と分岐性を明確化し、修士教育の価値に対する理解を再構築する視座を提供した。また、中国のような大規模な大学院進学ブームは見られない日本において、こうした「功利志向の常識化」自体が共有されにくく、本研究はそのような認識のズレを理解するための一助となり得る。

注

1. 『中国教育統計年鑑』2010年度から2023年度までの修士卒業生数および博士進学者数を基に算出された結果である。
2. 中華人民共和国教育部
http://www.moe.gov.cn/srcsite/A22/moe_826/202009/t20200930_492590.html (2026-2-24 アクセス)
3. 本調査の詳細は同一調査を用いた別稿（陳，2025）に詳述しているため、本稿では進路選択と価値意識の分析に焦点を絞り、必要最低限の情報のみ記す。
4. 2021年に教育部が公表した修士受験者数と、2022年の『中国教育統計年鑑』に公表された修士進学者数に基づいて算出した。
5. 中国における都市と農村の二重社会構造を示す制度で、「非農業戸籍（都市戸籍）」と「農業戸籍」に分かれ、社会保障、住宅、教育、就業などの面で格差を生じている。（小林熙直、2008、“中国の二重構造社会に関する一考察”，アジア研究所紀要、第35号、133-164頁。）
6. 中国の多くの都市では、高学歴人材引進政策の対象として修士以上の学歴を持つ者が優遇されている。例えば、北京、上海などの都市では、修士以上の学歴を持つ者に対して住宅補助、経済補助、戸籍移入ルートの開放が提供されている（各都市で具体的な政策内容や優遇措置は異なる）。
7. MCAを行うにあたり、因子得点を質的変数として扱う必要があるため、得点が中位数を基準に「重視」と「軽視」に変換した。この処理により、価値意識と進路希望の関係性を数量化し、進路選択における価値意識の役割をより明確に分析可能とした。

引用文献

- Becker, G., 1964、*Human Capital* (3rd ed.)、University of Chicago Press.
- Breen, R.・Goldthorpe, J. H., 1997、“Explaining Educational Differentials: Toward a Formal Rational Action Theory”、*Rationality and Society*、Vol.9、No.3、pp.275-305。
- 陳思源、2025、“現代中国大学生の大学院進学選択”、*東アジア教育研究*、第20号、61-76頁。
- 陳曦、2010、“中国における専門職学位の動向”、*名古屋高等教育研究*、第10号、237-251頁。
- 陳新忠・康誠軒、2022、“从招考分育到自由分流”、*学位与研究生教育*、61-67頁。
- Dore, R., 1976、*The Diploma Disease*、George Allen and Unwin.
- 藤田英典、1983、“学歴の経済的・社会的効用の国際比較”、*教育社会学研究*、第38集、76-93頁。
- 濱中淳子、2020、“企業の文系大学院修了者の採用行動”、*文系大学院をめぐるトリレンマ*、吉田文編、玉川大学出版部、104-116頁。
- 韓冀娜、2016、“中国における大学院への進学意識”、*早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊*、第23・2号、1-12頁。
- 韓立友・河合淳子・森真理子、2014、“東アジアにおける大学院入試の実態と国際的連携教育の可能性”、*京都大学国際交流センター論攷*、第4号、17-37頁。
- 黄梅英、2020、“中国における修士修了者の労働市場での評価”、*文系大学院をめぐるトリレンマ*、吉田文編、玉川大学出版部、196-210頁。
- 蔣純青、2017、*中国の高学歴化と大卒者就職諸相*、専修大学出版
- 荻谷剛彦、1995、*大衆教育社会のゆくえ*、中央公論社
- 李敏、2011、*中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題*、広島大学出版会
- 李敏、2016、“拡張路線にある中国の大学院教育の展開”、*中国における高等教育の変貌と動向*、69-86頁。
- 李波・王楠楠・沈玲・楊明・張學博、2023、“新时代硕士研究生教育培养高质量发展实现路径研究”、*大学教育*、1-5頁。
- 李琳、2013、“当代大学生自费留学动机及其形成条件研究”、*東北財経大学修士論文*。

馬丹、2021、“中国の全日制専門職大学院に関する実証研究”、桜美林大学博士論文。

満都拉、2013、“中国の全日制専門職大学院のあり方について”、東京大学大学院教育学研究科紀要、第52巻、287-296頁。

南部広孝、2016、東アジアの大学・大学院入学者選抜制度の比較、東信堂

向坂卓也、2022、“中国人学部生の大学院進学動機”、日本語教育方法研究会誌、第28巻第2号、102-103頁。

Spence, M., 1973, “Job Market Signaling”, *Quarterly Journal of Economics*, Vol.87, pp.355-374.

知念渉、2022、“大学を選択する論理とジェンダー”、教育学研究、第89巻第4号、552-564頁。

楊锐・楊团团・楊朝琨、2024、“硕士专业学位研究生培养问题与对策探赜”、高教与成才研究、第8期、5-8頁。

吉田文、2020、文系大学院をめぐるトリレンマ、玉川大学出版部

張輝、2015、“中国におけるMBA教育の現状と動向に関する一考察”、立教DBAジャーナル、第6号、13-25頁。

趙曼、2023、“新时代研究生教育质量保障研究”、知识文库、第24期、147-150頁。

(受付日：2025年10月24日、

受理日：2026年3月13日)

**Value Perceptions of Master's Education among Chinese
University Students:
Utilitarian Orientation and Its Differentiation by Post-
Graduation Aspirations**

CHEN Siyuan (Graduate Student, Sophia University)

Abstract

In recent years, master's education in China has expanded rapidly, and its role has shifted from academic training toward the development of job-ready skills and the enhancement of social status. This study aims to clarify how Chinese university students perceive the value of master's education. Based on an online survey, this study employs exploratory factor analysis and multiple correspondence analysis (MCA). The results indicate that students' value perceptions can be structured into four dimensions: perceived benefits of further education, perceived difficulty and cost of advancement, employment-avoidance orientation, and regional mobility orientation. Students intending to pursue graduate study within China tend to evaluate master's education positively as a means of career development and status attainment. In contrast, those intending to study abroad or enter the labor market are more likely to emphasize the risks and costs associated with further education and to relativize its value. These findings suggest that conventional interpretations that frame graduate school enrollment primarily as a utilitarian choice are insufficient. By revealing the differentiated structure of value perceptions underlying China's "graduate school boom," this study contributes to a deeper understanding of the social meaning of master's education and offers comparative implications for interpreting differences in educational attitudes between China and Japan.